

ねん にち
2020年6月14日

せいたい
キリストの聖体

きく ち いさおだい し きょう せつきょう
菊地功大司教 ミサ説教

とうきょうきょうく きんきゅう じたいせんげん かいじょ ご じょうきょう み まも つぎ
東京教区では、緊急事態宣言の解除後、状況を見守ってきましたが、次の
にちようび しょうきょうく かつどう だんかいてき さいかい
日曜日から、小教区における活動を段階的に再開することにしました。もち
かんせん しゅうそく しんちょう こうどう
ろん感染が終息したわけではありませんから、慎重に行動しなければなりま
せんので、当初の間は、感染対策をしたり、距離を保ったり、重篤化のリス
クが高い高齢の方にはしばらくは我慢をお願いしたり、いろいろな制約の中
たか こうれい かた が まん ねが せいやく なか
での再開となります。

し じゅんせつだいいちしゅじつ はじ さんかげつはん およ なが き かん しょうきょうく かつどう
四旬節第一主日に始まって三ヶ月半に及ぶ長い期間、小教区でのミサや活動
ちゅうし れいてき かわ たが まも
を中止してきました。霊的な渇きのうちにあっても、お互いのいのちを守る
た しの きょうりよく みな ところ かんしゃもう あ
ために耐え忍び、協力してくださった皆さんには、心から感謝申し上げます。

きょう なか ちりょう ぜんりよく つ いりょうかんけい
今日もまたこのミサの中で、治療のために全力を尽くしておられる医療関係
しゃ びょうしょう みな ところ いの
者と、病床にある皆さんのために、心からお祈りいたします。

なが じしゆく きかん せいたい しゅじつ お い ぎ ぶか
この長い自粛の期間を、キリストの聖体の主日で終わりとすることは、意義深
じしゆく とも きょうかい つど いの とき いっしょ
いことです。なんとんでもこの自粛は、共に教会に集い、祈りの時を一緒
い せいだいさいぎ せいだい げんそん
にできなかったと言うだけではなく、聖体祭儀にあつてご聖体のうちに現存
しゅ いっち しんこう いちばんたいせつ ひ せき
されている主イエスと一致するという、信仰にとって一番大切な秘跡から、わ
とお
たしたちを遠ざけてしまいました。

きょうかいけんしょう せいたい きょうできせいかつぜんたい げんせん
教会憲章において、聖体のいけにえは「キリスト教的生活全体の源泉であり
ちやうてん かんしゃ さいぎ しゃ しんてき
頂点」であつて、感謝の祭儀にあずかることで、キリスト者は「神的いけに
かみ じぶんじしん してき
えを神にささげ、そのいけにえとともに自分自身もささげる」と指摘されてい
ます(11)。

また^{きょうこう} 教皇ヨハネ・パウロ二世は、「^{に せい} 教会にいのちを^{きょうかい} 与える^{あた} 聖体^{せいたい}」において、
ご^{せいたい} 聖体^{じゅうようせい}の^の 重要性^のをこう述べています。

「^{きょうかい} 教会は^{すぎこし} 過越^{しん び}の^う 神秘^うから^う 生まれました。まさにそれゆえに、^{すぎこし} 過越^{しん び}の^め 神秘^めを目^め
に見^みえる^{あらわ} かたち^{ひ せき}で^{ひ せき} 表す^{せいたい} 秘跡^{きょうかい}としての^{きょうかい} 聖体^{せい かつ}は、^{ちゅうしん} 教会生活^{い ち}の^{い ち} 中心^{い ち}に^{い ち} 位置^{い ち}づけ^{い ち}られ^{い ち}
ます。(3)」

実際に^{じっさい} ミサ^のにあ^の ずか^る ことが^の でき^ず、^{きょうかい} 教会^{きょうどうたい} 共同^{たい}体^のにと^つて^の 一^い 番^ち 大^い 切^き な^の この^{せい} 聖^{せい} 体^{たい}の^の 秘^ひ 跡^{せき}に^の 共^{とも} に^の あ^ら ず^か る^る ことが^の でき^な かつ^た こと^は、^{きょうかい} 教会^のにと^つて^の 大^お き^く な^る 苦^く
しみ^{かな} であり、^{かな} 悲^{かな} しみ^{かな} でありました。

お一人^{ひとり} 一人^{ひとり}の^の 霊^{れい} 的^{てき} な^の 渴^{かわ} き^い を^い 癒^い や^す と^い う、^{こ じん} 個人^{しんこう} の^の 信^{しん} 仰^{こう} の^の 充^{じゅう} 足^{そく} と^い う^の 側^{そくめん} 面^{めん} も
もち^ろ ん^ん 大^{だい} 事^じ ですが、^{い じょう} それ^{い じょう} 以^{い じょう} 上^{い じょう} に、^{せいたい} ご^{きょうどうたい} 聖^{せい} 体^{たい}は^{ひ せき} 共^{ひ せき} 同^{ひ せき} 体^{ひ せき}の^の 秘^ひ 跡^{せき}です。そ^も 所^も 所^も ミ
サ^{じ たい} それ^{きょうどうたい} 自^{さい} 体^ぎが、^{せいたい} 共^{せいたい} 同^{ひとり} 体^うの^の 祭^{れい} 儀^{てき}です。聖^{せい} 体^{たい}は^{ひとり} 一^{ひとり} 人^う で^う 受^う け^う た^う と^し て^も、^{れい} 霊^{せい} 的^{てき} 聖^{せい} 体^{たい}
は^い り^{りょう} 一^{ひとり} 人^{ひとり} で^{ひとり} した^{ひとり} と^し て^も、^{きょうどうたい} 共^{まじ} 同^{まじ} 体^{まじ}の^の 交^{まじ} わ^{まじ} り^{まじ} の^の う^ち に^う わ^ち た^ち は^{せいたい} ご^{せいたい} 聖^{せい} 体^{たい}を
い^た だ^き ます。

それは^{し さい} 司^{し さい} 祭^{さい} が^{さい} 一^{さい} 人^{さい} で^{さい} ミサ^{さい} を^{さい} 捧^こ げ^こ ても、^{こ じん} 個人^{しんじん} の^の 信^{しん} 心^{じん} の^の た^め だ^け で^な く、^{きょうどうたい} 共^{きょう} 同^{どう} 体^{たい}
の^の 交^{まじ} わ^{まじ} り^{まじ} の^の う^ち に^う ミサ^{まじ} を^{まじ} 捧^お げ^お る^お の^の と^お じ^お じ^お であり^お ます。

「^{きょうかい} 教会^{あた} に^{せいたい} い^{つぎ} の^{しる} ち^る を^る 与^る える^る 聖^る 体^る」には、^{つぎ} 次^{しる} の^る よう^る に^る 記^る さ^る れ^る て^る います。

「^{し さい} (司^{さい} 祭^{さい} が^{おこな} 祭^{おこな} 儀^{おこな} を^{おこな} 行^{おこな} う^{おこな} こと) ^{し さい} それ^{れい} は^{てき} 司^{てき} 祭^{てき} の^{てき} 霊^{きょう} 的^{どう} 生^{たい} 活^{たい} の^{たい} た^め だ^け で^な く、^{きょうかい} 教^{きょう} 会^{かい}
と^{せ かい} 世^せ 界^{かい} の^{ぜん} 善^{ぜん} の^{ぜん} た^め だ^け に^{ぜん} も^{ぜん} な^り ます。な^ぜ なら『^{しん じゃ} た^と え^え 信^{しん} 者^{じゃ} が^{れつ} 列^{れつ} 席^{せき} で^{せき} き^な く^て も、
^{かん しゃ} 感^{かん} 謝^{しゃ} の^{さい} 祭^{さい} 儀^ぎ は^{こう} キ^き リ^き ス^き ト^き の^{こう} 行^{きょう} 為^{かい} であり、^{こう} 教^{きょう} 会^{かい} の^{こう} 行^{こう} 為^{かい} だ^か ら^い です』(31)

パウロは^{きょうかい} コ^て リ^が ント^み の^さ 教^さ 会^さ へ^さ の^さ 手^さ 紙^さ で、「^さ わ^さ た^さ し^さ た^さ ち^さ が^さ 裂^さ く^さ パ^さ ン^さ は、^さ キ^さ リ^さ ス^さ ト^さ の^さ
^{から} 体^{からだ} に^さ あ^さ ず^さ か^さ る^さ こと^さ で^さ は^さ ない^さ か。パ^さ ン^さ は^さ 一^さ つ^さ だ^さ か^さ ら、^さ わ^さ た^さ し^さ た^さ ち^さ は^さ 大^さ 勢^さ で^さ も^さ ひ

とつからだの体です。皆みなが一つひとのパンわを分けて食べるからたです」と述べて、聖体祭儀せいだいさいぎが共同体きょうどうたいの秘跡ひせきであることを強調きょうちようされます。

「聖体せいだいは交わりまじを造り出し、交わりつくを育だみます」と指摘まじする教皇はぐくヨハネ・パウロ二世してきは、聖せいアウグスチヌスきょうこうの言葉ことばを引いて、「主しゅなるキリストは・・・ご自分の食卓じぶんしょくたくにわたしたちの平和へいわと一致いっちの神秘しんぴをささげます。一致いっちのきずなを保つことなしにこの一致いっちの神秘しんぴを受ける者は、神秘しんぴを自分の救いじぶんすくのために受けることができません」(40)とまで指摘してきしています。

わたしたちの信仰しんこうは、共同体きょうどうたいの信仰しんこうです。わたしたちの信仰しんこうは、「交わりまじ」のうちにある信仰しんこうです。「交わりまじ」とは、「共有きょうゆうする」ことだったり、「分かち合うわあ」ことだったり、「あずかるあ」ことを意味いみしています。パウロのコリントの教会きょうかいへの手紙てがみに、「わたしたちが神かみを賛美さんびする賛美さんびの杯さかずきは、キリストの血ちにあずかることではないか。わたしたちが裂くパンさは、キリストの体からだにあずかることではないか」と記しるされていました。その「あずかるまじ」が、すなわち「交わり」のことです。わたしたちの信仰しんこうは、キリストの体からだである共同体きょうどうたいを通じて、キリストの体からだにあずかり、いのちを分かち合い、愛あいを共有きょうゆうする交わりまじのなかで、生きていいる信仰しんこうです。

これから段階だんかいてき的に公開こうかいミサが再開さいかいされて、制約せいやくがあるとはいえ、ご聖体せいだいをいただく機会きかいがあることでしょう。三ヶ月間さんかげつかん、あずかれない状態じょうたいが強制きょうせいされていたのですから、そのときの喜びよろこには大きいものがあることだと思おもいます。でもその霊的れいてき渴かわきの期間きかんを過すごしたわたしたちは、ご聖体せいだいを受ける意味いみをあらためて理解りかいしてから、拝領はいりようしたいと思おもいます。自分がキリストじぶんと信仰しんこうにおいて一致いっちするという個人的こじんてきな喜びよろこと同時に、拝領はいりようは共同体きょうどうたいの交わりまじのうちに、兄弟姉妹きょうだいと共に一つひとの体からだにあずかるのであり、だからこそ、一緒いっしょにあずかることのできない方々かたがたへ思いおもいを馳はせ、様々な思いさまざまを心おもに抱こころいている兄弟姉妹きょうだいに思いおもいを馳はせ、配慮はいりよと心配こころくばりの時ときとしていただきたいのです。

同時に、わたしたちはご聖体をいただくことで、「世の終わりまで、あなた方と共にいる」といわれた主イエスの約束を思い起こします。共にいてくださる主イエスは、その福音を世の終わりまで、世界の果てまで告げ知らせよと命じられた主です。ですから、ご聖体の秘跡にあずかるわたしたちは、福音を告げしらせないわけには行きません。

「教会にいのちを与える聖体」で、教皇ヨハネ・パウロ二世はこう記します。「キリストとのこの一致によって、新しい契約の民は、自分たちだけで固まるのではなくて、人類一致のための「秘跡」となります。すなわち、すべての人のあがないのために、キリストによってもたらされる救いのしるしと道具、世の光、地の塩となるのです。教会の使命とキリストの使命は連続しています。・・・感謝の祭儀はあらゆる福音宣教の源泉であると同時に頂点でもあるのです。」(22)

申命記に、「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」と記されていました。

ご聖体を受けるわたしたちは、人となられた神のみ言葉をわたしたちのうちにいただくのですから、聖書に記された神の言葉に耳を傾け、それを通じて、イエスと日々出会うことも欠かせません。

公開ミサがなかったことで、ご聖体を実際にいただくことに思いが集中しますが、ミサを形作っている言葉の祭儀において、まず神のみ言葉に耳を傾けることも、忘れてはなりません。

共同体の交わりと一致のなかで、ご聖体と御言葉のうちに現存される主イエスと出会い、心のうちに一致し、愛の分かち合いから力をいただき、宣教

への熱意を受け、聖霊に導かれながら、社会のただ中であって、福音をあかしし、告げてまいりましょう。